

## 富田満をめぐる諸課題

金城学院大学文学部教授

落合建仁

### 1. 富田満をめぐって

富田満（1883–1961）とはどのような人物であったか——たとえば、インターネットで検索にかけると、検索結果として「デジタル版 日本人名大辞典+Plus」（2015年）の一項目が表示され、次のように紹介されている。

1883–1961／大正–昭和時代の牧師。／明治16年11月5日生まれ。大正7年〔1918年〕アメリカのプリンストン神学校に留学。帰国後東京の芝教会牧師を41年間つとめる。昭和16年〔1941年〕日本基督（キリスト）教団の初代統理となり、戦後、明治学院院長、東京神学大・金城学院の各理事長などを歴任した。昭和36年1月15日死去。77歳。愛知県出身。神戸中央神学校卒。<sup>1</sup>



富田満が初代の統理者<sup>2</sup>となった日本基督教団は、1941年6月に日本国内のプロテスタント三十余派が合同して成立した。その規模は、教会伝道所数約二千、担任教師数約二千人、信徒数約二十万人であった<sup>3</sup>。

ところで、実は、富田満とはどのような人物であったかを、短くまとめてみせた文章（たとえば事典項目や略歴、小伝といった類のもの）というものは意外に少ない。たとえば、現在、比較的手に取って読みやすいものとしてすぐに思いつく限りでは、富田満（『キリスト教大事典』教文館、1963年）をはじめ、稻垣徳子（2010年逝去、芝教会副牧師、後に牧師）による「富田満略歴」（稻垣徳子編『富田満説教集』日本基督教団芝教会、1973年）、「富田満先生について」（『福音主義教会連合』第84号、1984年6月）、「富田満」（『キリスト教人名辞典』日本基督教団出版局、1986年）、「富田満」（『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年）くらいではないであろうか。

そのような中にあって富田満に関して比較的まとめた紹介がなされているものとして、眞山光彌〔金城学院宗教総主事〕「富田満——戦後復興時の理事長」（眞山光彌『金城を支えた人々』金城学院大学キリスト教文化研究所、1995年所収、136–40頁<sup>4</sup>）があげられるであろう。紙幅・時間の都合上、最後の部分のみを引用する。

ところで、富田満は、金城学院理事長としてよりも国家権力によって合同させられた日本基督教団統理として知られている。戦時下の神社参拝の容認、伊勢神宮参拝、大東亜戦争への協力など、教団責任者として彼が行ってきたことが、戦後厳しい批判にさらされたとき、彼は一切弁明しなかった。／戦後の市村〔與

\* 〈凡例〉一、史料の引用において、原則、変体仮名は普通仮名に、漢字の旧字体は新字体に改めた。二、史料の引用箇所における「/」は改行箇所を、「……」は省略を、「〔 〕」は引用者による補足を表す。三、本文中、敬称は現存の方々も含め、原則、省略した。四、引用文中、現代では差別用語や不快用語にあたると思われるものも、歴史的用語として使用せざるを得なかった箇所があることを断っておく。

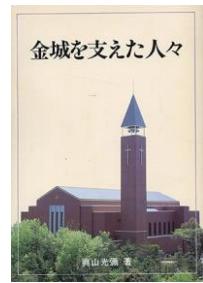
<sup>1</sup> <https://kotobank.jp/word/%E5%AF%8C%E7%94%B0%E6%BA%80-105841>。なお、「デジタル版 日本人名大辞典+Plus」は、書籍版「講談社 日本人名大辞典」（2001年）をベースに、項目の追加・修正を加えたデジタルコンテンツである。

<sup>2</sup> 統理者とは、宗教団体法（1939年4月公布、40年4月施行）において定められていた、教団の最高責任者。統理者は教団において選ばれ、文部大臣の認可を経て就任した。統理者は、教義、規則、教師の任免、寺院又は教会設立についてなど、教団を統理し、これを代表するものであった。日本天主公教教団（カトリック）では土井辰雄が、日本基督教団（プロテスタント）では富田満が就任したが（1941年）、戦後、宗教団体法の廃止に伴い（1945年）、統理者制も廃止された。〔文献〕土肥昭夫「教団統理者」（『日本キリスト教歴史大事典』）。

<sup>3</sup> 正確な数字は不明で、この概数は、『日本基督教団史資料集 第5巻』（日本基督教団宣教研究所、2001年）164頁と、『日本基督教団史資料集 第1巻』（日本基督教団宣教研究所、1997年）の13–18頁の記述に拠った。

<sup>4</sup> 初出は、眞山光彌「富田満」、『金城台』第178号、1994年4月10日所収、2頁。また、金城学院百年史編集委員会編『金城学院百年史』学校法人金城学院、1996年、583頁にも、同様の記述がある（ただし、「知られている」が「著名である」へ、「大東亜戦争」が「太平洋戦争」へと変更されている）。

市（1881-1953. 金城学院の教頭、校長を経て1941年理事長兼任、1949年大学設置とともに学長就任）は、戦時下の過ちを米国南長老教会派遣の使節団の前で告白したが、富田は一切弁明しなかった。戦後、ジェームズ・マカルピンが岐阜の自宅に富田満、市村與市、番匠鐵雄、近藤武一を招き戦時下の神社参拝を批判したとき、四人は黙して一言も語らなかったという。／富田の死後、貴重な資料は東京神学大学図書館に寄贈されたが、戦時下の統理としての苦悩について記されていた日記だけは寄贈されなかつた。彼の苦悩を知っているのは、神のみである。<sup>5</sup>



ここにも記されているように、富田満は戦時下の日本基督教団の責任者であったため（本日の主題「大東亜共栄圏とキリスト教——戦時期東アジア地域における教会合同運動」との関連で言えば、たとえば「日本基督教団より大東亜共栄圏にある基督教徒に送る書翰」〔1944年3月26日〕は彼の名前によって送られている）、戦後、日本基督教団の戦時下のあり方が問われる際に、富田の名が必然的に——多くの場合批判的文脈で——言及されるのであった。ここでその具体例をあげることはしないが、それは枚挙にいとまがないと言えよう。

しかし、富田満の名が批判的文脈で言及されることが多々あったとしても、その本格的な論考となると、これもまた意外なほどに数が少ない。たとえば、金田隆一「富田満と教団の戦争責任」（『福音と世界』1975年9月所収、29-38頁<sup>6</sup>）や柴田智悦「富田満の信仰と思想」（信州夏期宣教講座編『「日本のキリスト教」を超えて』いのちのことば社、2016年所収、

79-114頁）程度ではないであろうか。ただ、柴田智悦「富田満の信仰と思想」の場合であれば、その論は、ほとんど、稻垣徳子編『富田満説教集』（日本基督教団芝教会、1973年<sup>7</sup>）にのみ依拠して展開されたものであるなど、論じられる対象・範囲は限定的であったと言わざるを得ないであろう。

ここに、富田満をめぐる一つの課題があるように思われる。つまり、日本基督教団統理者としての富田満その人をめぐる諸問題——たとえば先ほど眞山光彌も言及していた諸点等——は幾つもあるかもしれないが、まずは、その思想や論理、行動について、広く史資料に基づいて精緻に検討・分析する手続きを経て評価する必要もまたあるのではないか。そもそも富田満の生涯さえも、実は詳らかではないのである。

最近では、「国立国会図書館デジタルコレクション」(<https://dl.ndl.go.jp/>) を利用することによって、調査・研究の幅も飛躍的に広まったはずである。もしも今後富田満研究に取り組もうとするならば、少なくとも、公に刊行されているものの中に見られる、たとえば富田満の言葉等に可能な限りあたろうとする誠実な姿勢は重要と思われる。

## 2. 未公刊資料

その上で、富田満研究がこれまでなかなか展開されなかつた理由——種々考えられるのであるが——その一つとして、史料的制約という面もあつたであろうことについて触れておきたい。

<sup>5</sup> 真山光彌『金城を支えた人々』金城学院大学キリスト教文化研究所、1995年、139-40頁。

<sup>6</sup> 同論考はその後、金田隆一『戦時下キリスト教の抵抗と挫折』（新教出版社、1985年）に収められる。

<sup>7</sup> 富田満自身による著作はごくわずかで——そのこともまた富田理解をより難しくしていると思われる——この説教集は数少ない一つである。なお、説教集に関しては次のような富田満の言葉が、座談会の中で間接的に紹介されている。「なぜ著書がないのか／青山〔四郎。聖文舎主事〕」「富田さんの著書はないね」／横田〔市治。『基督教通信』編集者〕「いやそれは、〔富田〕先生言うのに、自分は、説教の原稿で二十五巻ぐらいになるものがあるが、出しても売れないに決まっている。出版社に迷惑をかけるに忍びない、と」（笑）／高戸〔要。『月刊キリスト』編集者〕「そういう心がけはぜひ牧師先生がたにしてほしいですね」（笑）（「ちかごろの話題——キリスト教誌編集者座談会」、『基督教新報』第3242号、1961年2月11日、5頁）。

「富田資料」 先ほど、眞山光彌の文章の中に「富田の死後、貴重な資料は東京神学大学図書館に寄贈されたが、戦時下の統理としての苦惱について記されていた日記だけは寄贈されなかつた」との記述があった。このうち、東京神学大学に寄贈された資料とは、「富田満氏資料」(以下、「富田資料」)として一部の研究者に知られている<sup>8</sup>。この「富田資料」の内容は大きく分けて3種類、「教団創立経過に関する資料」「教団規則関係資料」「文部省関係資料」があり、段ボール一箱分、目録によれば合計百種類ほどの原資料が収められている(目録には「1967年12月22日」と記されている)。



この資料を第一次資料として用いた研究は、たぶん、堀光男『日本の教会と信仰告白』(1970年)と先述の金田隆一、そして筆者<sup>9</sup>による各研究程度ではないであろうか。「富田資料」は教団史研究においてなお、今後も十分に活用していくべき資料であると思われる<sup>10</sup>。

**海外資料** このように、富田満をめぐっては、公刊されていない資料(=アクセスのやや難しい資料)もまた意外に多いのであり、次のようなケースも同様にその一つと言えるであろう。筆者は(松谷暉介先生と)今年の2月にアメリカはフィラデルフィアにある長老派歴史協会(Presbyterian Historical Society)に別件で研究調査に赴き、あわせてプリンストン神学校のゲストハウスにて宿泊滞在したが、その際、富田満についても少しだけ調べたことがある。プリンストン時代の富田について言及した論考といったものは、これまで皆無だったからである。

すると、プリンストン神学校では、同図書館から「Registration in Princeton Theological Seminary」【プロジェクト画面①参照】を紹介していただくことができた。富田満がプリンストン神学校に留学していたことをはじめ、この資料からは、たとえば名前「満」となる以前はやはり「Tokumaru」(徳丸)であったこと等が確認できる。[個人メモ:誕生日は1883年9月5日?11月5日?/出生地は「Aioi Nagoya Japan」?/「Tomida」?]



左から、①長老派歴史協会(PHS)外観、②閲覧室、③PHS所蔵資料より：市村與市の葬儀(於金城教会、1953/4/10)に富田の姿が見える。

また、長老派歴史協会では、H・W・マヤス宣教師(1874-1945)<sup>11</sup>の報告書簡(英文)【プロジェクト画面②参照】の中で、富田満を紹介する中で、彼は日露戦争に従軍したが戦死したこと、そのため元の名前は親戚

<sup>8</sup> これはすでに、「腹のすわった富田満／宮内〔彰。基督教新報主筆〕」「最近なくなつた、富田満先生もやはり話題になる。何かかきのこしたものがあるらしいですね」／和氣〔清一。キリスト新聞社編集局長〕「富田メモ」があるのですか」／横田「ありますな」／宮内「発表しないにしても、誰かが読んでおいてよいと思う」／青山「あの困難な時期をいかに維持してきたか、興味ありますね。政治的手腕が何しろすごい」(前掲「ちかごろの話題——キリスト教誌編集者座談会」)とか、「ことに、教団の指導者であった富田満氏の「富田メモ」「富田日記」は、遺族の意向もあることであろうが、公刊されることを希望する。日本の教会史の貴重な資料となるはずであろうから」(井上良彦「第三章 政治倫理の諸問題」、日本基督教団宣教研究所編、執筆者:井上良彦・村上伸・加藤邦雄『教会と政治の問題』日本基督教団出版部、1961年8月所収、88頁)といったように、早くからその存在が指摘されていたものである(なお、ここの「富田メモ」が後の「富田資料」にあたるものと思われる。当然ながら、2006年にその一部が公開された、元宮内庁長官の富田朝彦がつけていたとされるメモ“富田メモ”とは全く別のものである)。

<sup>9</sup> 最近では、拙論「日本基督教団成立時の「部制」について——旧日本基督教会の視点から」、日本基督教団・改革長老教会協議会・教会研究所、季刊『教会』第129号、2022年12月所収、32-46頁。

<sup>10</sup> 『日本基督教団史資料集』に収められているものもあるが、それらは「富田資料」の全体像からはごく一部に過ぎない。「富田資料」のコピーは、文献によれば、日本基督教団宣教研究所(『日本基督教団史資料集 第1巻』418頁)および日本基督教会横浜海岸教会(『蔵書目録(1980)』日本基督教会大会歴史編纂委員会、1980年、52頁)等に所蔵されていることである。

<sup>11</sup> 米国南長老派教会宣教師。1897年来日。岡崎、徳島、豊橋を経て、1909年から神戸で伝道。徳島時代には義兄C・A・ローガンと協力して徳島教会の建設に当たり、1904年には賀川豊彦を導いて授洗した。後に神戸神学校の校長となった。(豊田市図書館websiteより)

の別の人々に譲られたこと、帰国の後に新たな名前として「満」を選んだこと、その理由は満洲に由来するといった<sup>12</sup>、多分これまで誰にも知られていないエピソードまでも記されていた。

これら僅かな例からも分かるように、さらに戦前の日本基督教（旧日基）と米国長老派教会との関係、そして戦後の日本基督教団と北米諸教会との関係をも考える時、海外資料に記された富田満に関する記述も無視しえないものがあるであろう。

**芝教会所蔵資料** 最後に、「戦時下の統理としての苦惱について記されていた日記だけは寄贈されなかった」とあった「日記」についてである。筆者はこれを以前から長らく探しており、機会あるごとに複数の関係者にあたってきたが、その所在を確認できず、もはや入手しないものようであった。その上で、知り合いの牧師の紹介を通じ、今年の7月に日本基督教団芝教会（東京都港区虎ノ門）を訪れて——「日記」の存在の確認を第一の目的として——資料調査を行うことができた。資料調査にあたっては、石井道夫牧師に大変お世話になった。この場を借りて御礼申し上げたい。

残念ながら「日記」はやはり見つからなかつたが、思いがけず、同教会には夥しい数の貴重な資料が収められていたことが分かった。戦災を経験したにも関わらず、戦前（大正期くらいまで）の長老会記録や教会員名簿、週報、教会報（たとえば、教会報『芝教会々報』第7号[1961年3月12日発行]は特集「富田満牧師記念号」として編まれ、『芝教会青年会報』第50号[1961年1月号]<sup>13</sup>も同様であることが分かる）、写真等が数多く保管されていた。これらを丹念に読み解くことはきっと重要なことと思われる。

芝教会所蔵資料の中で、特に興味深かったのは『SCRAP BOOK』【プロジェクト画面③参照】である。紙幅・時間の都合上、全体の紹介はできないが、そこには、富田満のアメリカ留学時のパスポート、C・A・ローガン（1874-1955、南長老教会宣教師）の紹介状、芝教会からの招聘状等、重要な書類が多数貼られている（但し、教団成立の経緯に関するものは少ない）。これは、従来からその存在を指摘されていた東京神学大学所蔵「富田資料」、幻の「富田日記」とも異なる、第三の資料——仮に「富田スクラップブック」とする——と見ても差し支えないであろう。



左から、①芝教会所蔵富田満関連資料（一部）、②笑顔の富田満（日付不明。笑顔で写った写真は大変珍しい）、③『SCRAP BOOK』。

これほどまでに富田満関連の文献・資料が都心にありながら、それまで誰からもアクセスが無かつたようである。この度筆者は、御好意により段ボール一箱分をお借りすることができた。よって、筆者は、ひとまずこれらの資料の全容を把握・整理する作業に取り掛かりたいと願っている。より具体的には——関係者・関係各所と協議しながら——詳細な個別資料紹介や目録の作成といった基礎的作業等が考えられるであろう。

以上、本発表では対象を、富田満をめぐる現在の資料状況に焦点を絞り、それを一課題として共有させてい

<sup>12</sup> 『官報』1906年4月24日によれば「○明治三十七年十一月十二日／叙勲八等授白色桐葉章 陸軍砲兵上等兵 富田徳丸」とあり、『官報』1908年5月8日によればその父親は「富田新左衛門」であるとされているため、この「富田徳丸」が後の「富田満」であることは間違いないであろう。岩谷松平・田中嘉藤治編『日露戦歿忠魂録 第十一師団之部』（編輯兼発行人岩谷松平、1906年）によれば、「明治三十七年十一月十一日清国盛京省東口冠山砲台戦闘ノ際負傷同十二日第一野戰病院ニ於テ死亡」（90頁）とあり、靖国神社社務所編『靖国神社忠魂史 第3卷』（靖国神社社務所、1934年）によれば、「一野病」において同じく1904年11月12日に戦死したことになっているが、「一野病」とは前後の文脈から「大孤山北麓一野病」のことであろう（161頁）。「大孤山」は、（地域としての）満州に位置する。

<sup>13</sup> 芝教会青年会によって後日編まれたものとして、木口昭太郎編『神愛——富田満牧師一周年記念青年会特集号』（芝教会青年会編集部委員会、1962年）が知られている。

ただいた。このことを通して、今後の富田満研究の展開に、さらには日本基督教団史研究全体の展開に、少しでも資することができれば幸いである。